

メッセージアウトライン ヨシュア記5:13～6:27 「エリコの攻略」

イスラエルの民は主なる神の力によって超自然的にせき止められたヨルダン川を渡って、ついに神が約束されたカナンの中に入る事ができた。彼らが信仰をもって神を第一にして従っていった時、神が道を開き、最善の導きを与えてくださったのである。イスラエルが次に攻略すべきエリコの町はもう目の前である。彼らはエリコの近くのギルガルという場所で宿営した。(5:10)

[5:13]「ヨシュアがエリコにいたとき、目を上げて見ると、ひとりの人が抜き身の剣を手に持って彼の前方に立っていた。ヨシュアは彼のところに歩み寄って言った。『あなたは私たちの味方ですか、それとも敵ですか。』」

ヨシュアはこれからいかにしてエリコの町を攻略すべきかに思いを巡らすためエリコの町が見えるほどの所まで近づいた。彼は部下にも知らせず、ひとりでひそかに夕暮れ時にでも敵に見つからないように来たのであろう。しかし、ふと彼が目を上げて見ると、ひとりの人が抜き身の剣を手に持って前方に立っていたのである。ヨシュアはこの人に何か普通とは違うものを感じたのであろう。彼はこの人に、自分たちの敵か味方かと問うた。もし敵ならばヨシュアはひとりで来ていたと思われるので大変な危機である。ヨシュアが倒されたらイスラエルはバラバラになってしまう。

[14] しかしその人はヨシュアに答えた。「いや、わたしは主の軍の将として、今、来たのだ」たしかにイスラエルはこれからカナンの地で先住民族と戦い、征服していくことによって、その地を主の約束どおり自分たちのものとしていくのであるが、この戦いは単なるイスラエル民族としての戦いではなく、主の戦いであり、主がまず先頭に立って戦うのである。そしてイスラエルは信仰をもって、その主に従って戦う。それゆえイスラエルは主なる神抜きに戦うことはできないのである。

目の前の人は「主の軍の将として、今、来た」と言う。ヨシュアはこの戦いは主の戦いであるということは良く知っていたが、実際に目に見える姿で主の軍の将が現れたのはこれが初めてであった。彼は主の使い(天使)であったであろう。→民:22:31, I 歴21:16 それでヨシュアは顔を地に付けて伏し拝み、彼に言った。「わが主は、何をこのしもべに告げられるのですか」

[15]「主の軍の将はヨシュアに言った。『あなたの足の履き物を脱げ。あなたの立っている所は聖なる場所である』そこで、ヨシュアはそのようにした」

「あなたの足の履き物を脱げ…」このことばはモーセがかつて燃える柴の中から神の声を聞いた時と全く同じことばである。→出3:5 モーセの後継者であるヨシュアはイスラエルの出エジプトの指導者として召されたモーセと、今、まったく同じ立場に立たされているのである。

「あなたの立っている所は聖なる場所である」…すべての人間はアダム以来、神の前に罪ある者となっており、ヨシュアといえども例外ではない。ここではその罪に汚れたヨシュアが、「履き物を脱げ」との神の一方的な宣言によって、神の聖なる領域に属する者として取り扱われている。神の臨在される所、そこは聖なる所となる。「ヨシュアはそうにした」…彼はもはや神の命じられるすべてのことをそのまま実行するのみである。

[6:1]「エリコはイスラエルの子らの前に城門を堅く閉ざして、出入りする者はいなかった」

エリコの町は偵察に来たイスラエル人たちを逃がしたときから、非常な危機感をもって町の防衛体制を整えていたと思われる。城壁はさらに補強され、城門には堅くかんぬきが降ろされていたことであろう。エリコの町の住民は皆かたずをのんで鳴りを潜めていた。

これをまともに攻めるなら何か月もあるいは何年もかかるかもしれない。そうしているうちに、あきらめて別の場所へ移動していくことをエリコの住人は願っていたかもしれない。そのような状況の中で主の軍の将がヨシュアの前に現れたのである。彼はヨシュアに何をすべきかを告げる。

[2] まず彼は「見よ、わたしはエリコとその王、勇士たちをあなたの手に渡した」と宣言する。まだ何も起こっていないのに、すでにそのことが起こってしまったかのように言われている。このことはヨシュアやイスラエルの民をどれだけ力づけ、確信を与えたことであろうか。主が言われたことは必ずなるのである。あとはイスラエルの民が信仰をもって従うのみである。

[3-5] 彼らがなすべきことは、戦士はみなエリコの町の周りを一日一度回る。そしてそれを六日間続けること。そして戦士たちとともに神の臨在の象徴である契約の箱も、それぞれ雄羊の角笛を持った七人の祭司たちが、その箱の前を歩いて角笛を吹きながら回る。これを一日一回、六日間続ける。そして七日目には七回町を回る。そして最終の七回目に祭司たちが角笛を長く吹き鳴らす。イスラエルの民がその長く吹き鳴らす角笛の音を聞いたら、民はみな、大声でときをあげる。すると町の城壁が崩れ落ちるので、民は町の中にまっすぐに攻め上れ。

このように主の軍の将はヨシュアに告げたのである。彼はヨシュアに城壁を崩すための道具を作れとか、城壁を上るためのはしごをたくさん作れとか、持久戦に備えて塹壕を掘れとか言わなかった。ただ戦士たちと七人の祭司たちと祭司に担がれた契約の箱が一日一回エリコの町の周りを回り、七日目は七回回って最後に祭司たちが角笛を長く吹き鳴らしたら、民はみな大声でときをあげよ。すると城壁が崩れ落ちるので、民はみな攻め上れと言ったのである。

人間的な常識から考えるならば、そんなことはとても起こるはずがなかった。しかし、ここに至る

まで数々の奇跡、力あるわざを体験してきたヨシュアはただちに主の軍の将の言うことに聞き従ったのである。

[6-18] 6節以下はヨシュアとイスラエルの民が主のことばに忠実に従って行った様子が書かれている。

イスラエルは主の軍の将が告げたとおりに実行し、六日間が過ぎ、七日目になった。その日は朝早く夜が明けかかるころから町の周りを回り始め、ついに町を七度回った。(6~15)

どれくらい時間がかかったかは分からないが、もうすでに太陽は高く昇っていたであろう。七度目の終わりに祭司たちは角笛を長く吹き鳴らした。その時、ヨシュアは民に言った。「ときのをあげよ。主がこの町をあなたがたに与えてくださったからだ。この町とその中にあるすべてのものは主のために聖絶せよ。遊女ラハブと、その家にとともにいる者たちだけは、みな生かしておけ。彼女は私たちが送った使いたちをかくまってくれたからだ。あなたがたは聖絶の物には手を出すな。あなたがた自身が聖絶されないようにするため、すなわち、聖絶の物の一部を取ってイスラエルの宿営を聖絶の物とし、これにわざわざいをもたらさないようにするためである。」(16~18)

「聖絶する」とは主のために滅ぼし尽くして主にささげるという意味である。しかしイスラエルの斥候をかくまったラハブとその一族はすべて生かしておかなければならない。また「聖絶の物には手を出すな」とは主なる神の戦いにおいては、敵の人民、所有物はすべて主にささげるべきものとして滅ぼし尽くさなければならぬ。そこには人間的な同情とか、貴重品を壊すのは惜しいというような愛着心は許されないのである。もし、むさぼりの心を起こして聖絶の物を取って自分のものにするなら、その結果、逆にイスラエルの宿営、すなわちイスラエルの民全体が聖絶の対象となつてわざわざいをもたらされることになるのである。

[19]「ただし、銀や金、および青銅や鉄の器はすべて主のために聖絶されたものである。それらは主の宝物倉に入れよ」

銀、金、青銅や鉄はすべてきよめを意味する火を通して精錬されたり、造られたりしているのだから、一般的な意味で「聖別されたもの」として扱われたのであろう。

[20-21]「民はときのをあげ、祭司たちは角笛を吹き鳴らした。角笛の音を聞いて民が大声でときのをあげると、城壁は崩れ落ちた。そこで民はそれぞれ、まっすぐに攻め上り、その町を攻め取り、町のをすべて、男も女も若者も年寄りも、また牛、羊、ろばも剣の刃で聖絶した」

イスラエルの民は二百万人ほどいたと思われるが、その全員が大声を上げた時、どれほどの声の大きさになるか想像がつかない。どんなコンサートホールでの大合唱もこれには全く及ばない。それはものすごい迫力で近隣の住民たちに聞こえ、ま

たカナンの地の遠方まで響き渡ったことであろう。その時、高くそびえ立っていたエリコの町の城壁がなんと崩れ落ちてしまったのである。後に二十世紀の考古学者たちがエリコの遺跡を発掘したところによると、城壁は二重になっており、外側の城壁は外に向かって崩れ落ち、内側の城壁は外側と内側との間にあった空き地に倒壊したことが明らかになった。その崩れ落ちた城壁を乗り越えてイスラエルの民はいつせいにエリコの町に入り、すべてのものを滅ぼして町を攻め取ったのである。

[22-23]「ところで、ヨシュアはこの地を偵察した二人の男に言った。『あの遊女の家に行き、あなたがたが彼女に誓ったとおりに、その女とその女に連なるすべての者を連れ出さない。』偵察した若者たちは行って、ラハブとその父、母、兄弟、彼女に連なるすべての者を連れ出した。彼女の親族をみな連れ出し、イスラエルの宿営の外にとどめておいた」

ラハブは二人の斥候との約束のとおり、家の窓に赤いひもを結び付け、その家の中に家族、親族、彼女に属するすべての者たちを集めており、そのようにして彼女とその一族はみな、死から救い出されたのであった。

[24]「彼らはその町とそこにあるすべてのものを火で焼いた。銀や金、および青銅や鉄の器だけは主の家の宝物倉に収めた」

イスラエルの民はすべてヨシュアが命じたとおりに行動した。今日では発掘されたエリコの遺跡には火で焼かれた跡があることも確認されている。

[25] ラハブの一族がどうなったかという、彼らはすべてヨシュアが生かしておいたので、イスラエルの中に住むことができた。

余談であるが、このラハブは後にエリコを偵察した二人の若者のうちの一人と結婚したと思われる。そして彼女は後に世に来られる救い主イエス・キリストの家系につながることになるのである。→マタイ1:5~6 これも不思議な神のご計画である。しかし、神はあえてこの異邦人の女性を救い主の家系に加えることによって、神の救いはイスラエル人のみではなく、全世界がその対象であるということを示しておられるのである。

[26]「ヨシュアは、そのとき誓った。『この町エリコの再建を企てる者は主の前にのろわれよ。その礎を据える者は長子を失い、その門を建てる者は末の子を失う。』」

この後、エリコにはすぐにイスラエル人が住むようになったので→士師記3:13、申命記34:3

このヨシュアののろいのことばは、エリコをカナン人が住んでいた時のように、城壁のある町として再建するという意味であると思われる。約五百年後、北イスラエルの王アハブの時代にベテル人ヒエルがエリコを城壁の町として再建した時にこの預言は成就した。→ I 列王16:33-34

[27]「主がヨシュアとともにおられたので、彼のうわさはこの地にあまねく広まった」

エリコ陥落のニュースは、カナンの全土に広がり、ヨシュアに対する恐れはますます広まったのである。

今日の箇所では教えられることは何か。

自力で頑張るのではなく、信仰をもって主のことばに従い、行動するところに神の御力が現れ、そこに勝利が与えられる。

私たちも神のみことばである聖書をよく読み、そこに示されている神のみことばと、神の私たちに対するすばらしい約束を覚え、そのみことばに生きることが大切である。

そのようにしていく時、必ず主は私たちの人生を通して御力を現してくださり、私たちは神を喜び、賛美し、神の栄光をほめたたえる者となり、神が私たち信仰者とともにおられることを世の人々は知ることになるであろう。→ヨシュア1:9